

新潟県知事賞

見守るということ

上越市立黒田小学校

六年 いし の まな か
石 野 愛 華

私の母は特別養護老人ホームでケアマネージャーとして働いています。そのため、認知しょうについて、年を重ねるとどのような体の変化があるか、駐車場のマークについてなど、福祉に関することは日頃から教えてもらっていました。

そんなある日のスーパーマーケットでの出来事です。ひざが曲がったまま、両足は外側を向いて、左右にゆれるように歩いている高れいの男性に会いました。買い物を終えて、買い物ぶくろを重そうに持っていました。

転んでしまわないか、荷物を持ってあげようか。でも声をかける勇気もない。どうしようとなやんでいると、その男性の歩き方を見て指をさして笑う人がいました。

とっさに男性に「荷物を持ちますよ」と声をかけました。どうしようかなやんでいたのがうそのように体が動き、声をかけていました。

しかし男性は「ありがとう。でも大丈夫だよ。こんな歩き方でもちゃんと歩けるんだよ。見ていてね。」と言いました。

その男性は時間をかけて車まで荷物を持って歩いて行きました。そして、声をかけた私にお礼を言ってくれました。「声をかけてくれただけでもうれしいよ」と。

私は、福祉についてたくさんを知った気になっていました。何か手を貸すことが助けることだと思っていましたが、人によっては必要以上に手を貸すのではなく、「見守る」ということも助けることの一つだと感じました。

この出来事について母と車の中で話をしました。今回、声をかけたこと、また感じたことは大切なことだと言われました。手を貸してほしい人もいれば、手を貸さずとも見守っていてほしい人もいます。逆に手を貸してほしくない人もいます。今後も、困っている人がいたら声をかけたり、必要なことを助けていきたいと思います。

「何か手伝うことはありますか」と。

先輩から学んだごみ拾いの大切さ

新潟県立柏崎翔洋中等教育学校

二年 さか い ま ひろ
酒 井 麻 寛

私は、長岡市から柏崎市まで電車通っている。そして、バスや徒歩で学校まで向かう。通学路や、バスや電車の車内には、「いつも、ごみが落ちている。たばこの吸い殻などの小さなごみ。時には、袋に入った家庭ごみ。みなさんは、道に落ちているごみを積極的に拾おうと思ったことがありますか。私は一度もない。だって、汚いから。」

私はもともと、ごみに関心が無かった。というより、「道に落ちているごみは汚いから絶対に触ってはいけない」と思っていた。だがある日、その考えを覆すような事が起きた。

私と電車の方向が同じ先輩と一緒に駅まで向かっていた時だ。道にごみが落ちていた。私はいつもと同じように、通り過ぎようとしていた。でもその先輩は違った。私に「すぐ戻るから少し待ってて。」と言い、そのごみを拾った。そして、近くのコンビニのごみ箱に捨てた。また別の場所では、ごみ箱が近くに無かったため、駅までごみを持っていった。私は、先輩がなぜそこまでして、道に落ちているごみをごみ箱に捨てるのかが分からなかった。私はその疑問を先輩に問いかけた。「道に落ちているごみなんて、汚いと思わないのですか。」

先輩は答えた。「私は汚いなんて思わない。だって、自分の手が汚れるより、環境が汚れる方が嫌だから。」

私ははっとした。ごみは汚いから拾わない。その考え方が普通だと思っていたから。でも、こんなに身近に、自分のことより環境のことを優先して考える人がいるなんて、思いもなかった。

そこから私は考えた。落ちているごみを、自分のものではないからと、見て見ぬふりをしてはならない。でも、普段から道に落ちているごみを拾おうとは、考えれなかった。だって、誰が出したものかも分からないごみを、自ら拾うのはやっぱり怖かったから。でも、ごみに対する意識は変わった。学校の教室や廊下にごみが落ちていたら、拾ってごみ箱に捨てる。そんな小さな行動だった。それでもやはり、気持ち良かった。それは、私が少しでも環境問題の解決に、協力できている。そう思えたから。

私は道に落ちているごみを積極的に拾う先輩に憧れて、ごみに対する意識を変えられた。そして、今でもその意識を持ち、行動を続けている。すぐに手を洗うことができる環境ならば、私も先輩のように積極的にごみを拾える。環境問題は、SDGsの十一番、「住み続けられるまちづくりを」や、十四番、「海の豊かさを守ろう」、十五番、「陸の豊かさを守ろう」につながる。みなさんも、地域のごみ拾い活動に参加したり、学校内のごみを積極的に拾ったりしてみませんか。自分で出したごみは、責任を持って自分で持ち帰り、これ以上ごみを増やさないようにするだけでもいい。みんなで住む町を、みんなで作っていききたい。それが、私の思いだ。

新潟日報社長賞

これから私ができること

上越市立安塚中学校

三年 わた なべ
渡 辺 みのり

私の祖母は、私の家から歩いて数十秒ほどのところに住んでいました。赤ちゃんの頃から私の面倒をよく見てくれて、お風呂に入れる手伝いをしてくれたり子守唄を歌って寝かしつけてくれたりと、母をたくさん助けてくれたそうです。私が幼稚園に入園する前は、一緒にシャボン玉を吹いて遊んだりお絵かきをしたり、近所の駄菓子屋さんへ連れて行ってくれたり…と、祖母と共にたくさんの時間を過ごしてきました。私は優しい祖母が大好きでした。

いつも元気でニコニコ笑っていた祖母ですが、私の成長と共にだんだんと年を取っていきました。そのせいで「苦手なこと」が増えていったようです。ペットボトルのフタを開けたり、高い所にある物を取ったり、小さな字を読んだり…など例を挙げるとキリが無いくらいに苦手なことが増えていきました。

祖母の家に遊びに行った時、私は祖母が苦手になってしまったことを手伝うようにしていました。私が、

「手伝うよ？」

と言ってサッと行動すると、祖母は困った顔から優しい笑顔に変わり、

「ありがとうね。」

と嬉しそうに言ってくれました。私は祖母が喜んでくれるのが嬉しくて、もっと祖母を助けてあげたいいつも思っていました。

足腰は弱っても元気いっぱいだった祖母でしたが、私が小六の冬の夜に突然亡くなってしまいました。数時間前まではとても元気だったのに…。コロナ禍で祖母の家に遊びに行ったり一緒に出かけたりすることがなかなかできない日が続いていた中、本当に突然、私たちの前からいなくなってしまいました。

「もっと祖母のために、私にもできたことがあったのではないだろうか？」

祖母が亡くなってから数年経ちますが、私はずっとこのことについて考えています。もっと祖母のそばにいて助けてあげて、祖母を笑顔にできたのではないだろうか？と思うと祖母との別れが突然来てしまったことが悔しくてたまらなくなってしまいます。

今回この作文を書くにあたり、私は家族に自分の今の気持ちを話してみました。祖母にもっといろいろなことをしてあげたかったこと、突然だった別れが今も悔しくて悲しくてたまらないこと…。私の話を聞いた母は、私にこう言いました。

「ばあばは、みのりがいつも助けてくれたからとっても嬉しかったと思うよ。もっと助けてあげたかったって思ってるのも、きっと喜んでくれてると思う。でもね、そのことでみのりが悔しくて悲しくて苦しんでるのを見たら、ばあばも悲しくなっちゃうかもしれないよね。ばあばはきっと、みのりが幸せで笑顔でいるのが一番嬉しいんじゃないかな？」

母の言葉を聞いて、私は私の幸せを願ってくれている祖母のためにもいつも笑顔でいたいと思いました。そしてそれと同時に、祖母にできなくなってしまった手助けを他の人たちにもしていきたいと思うようになりました。

世の中にはきっと手助けを必要としている人がたくさんいると思います。困っていても手伝ってほしいと言うことができない人も、もしかしたらいるかもしれません。私は困っている人がいたら声を掛けて、サッと手助けをできる人間になりたいと思います。

困っている人を助けてたい

三条市立栄北小学校

六年 し ぶ や ら ん か
 洪 谷 蘭 花

みなさんは、身近に障害を抱えている人がいたり、困っている人に会ったりした事がありますか。

わたしの父と母は健聴者ですが、わたしと弟は耳が不自由でほちよう器、弟は人工内耳をつけています。家では手話と口話を使って会話しているので、不自由を感じる事なく生活しています。

ほちよう器は、機械なので雨にあたったり、夏にあせをかいてそのままにしておいたりすると、こわれてしまいます。その他に、声が聞きづらく何を言っているのか分からない、マスクで口が見えなくて何回も聞き返し、周りに迷わくをかけている事があるのではないかと思う時があります。そんな時、何も障害がなければ良かったと考えたことが今までに何度もありました。

しかし、良かったと思うこともたくさんあります。幼い頃、ろう学校に通い、同じ難聴の友達ができ、手話を覚えることができたからです。今は地元の小学校に通い、健聴の友達に「おはよう」「ありがとう」などの日常会話で使う言葉を手話で教えると関心を持ってくれました。すると、わたしが知らない季節や食べ物の手話を覚えてきてくれて、わたしに教えてくれました。友達は、難聴という障害を受け入れてくれて、聞き取れなかった言葉をもう一度言ってくれたり、口元を見せて話してくれたり、大きい声で話してくれたりします。ロジャーやパスアラウンドマイクも積極的に活用してくれています。

わたしは、耳が不自由でも健聴、難聴関係なくたくさんの友達がいます。みんな優しく接してくれるのですごくうれしいです。

わたしは、家族、友達、周りのたくさんの人から助けられてきました。でも、まだまだ手話が通じないことが多いです。手話をもっと多くの人に広まったらいいと思います。

耳の不自由な人がもっと過ごしやすくなるために、これからもたくさんの手話を学び、友達や家族、いろいろな人に手話を教え、みんなが手話で会話できるようになり、健聴者も難聴者も関係なく、仲良く交流できたらいいと思っています。世の中には、耳の障害だけではなく、いろいろな障害を抱えながら生活している人がたくさんいます。その人たちの大変さや困っていることを知りたいです。知ることで、わたしに何かできるのではないかと考えています。困っている人を助けるということは、今まで周りのみんなに助けてもらった、わたしの大切な役目だと思います。

これからは、「困っている人を助ける」という気持ちを忘れずに生活していきます。

新潟県社会福祉協議会長賞

お母さんのたすけあい

新潟市立白山小学校

三年 あい ざわ こ はく
會 澤 琥 珀

「なにかお手伝いできることはありますか。」わたしのお母さんは外にいと、おじいさんや、おばあさん、車いすの人たちに声をかけることがあります。車いすをはこんだり、かいだんをいっしょにおりたり、レインコートをたんであげたり、お手つだいをしているすがたをわたしはお母さんのうしろでじっと見えています。お手つだいをするとみんなにっこりと、「ありがとう。」と言ってくれます。わたしはそんなお母さんをすごいな、カッコいいな、と思うけど、ちょっぴりはずかしい気もちもあります。

なんではずかしい気もちになるのかな？それを考えてみました。知らない人に急に話しかけるのはドキドキしてきんちようしてしまいます。大人に声をかけるのは、こわい気もちもあります。自分がするとはずかしく感じるのでお母さんが話しかけるとはずかしいのだと思います。あとは、お母さんがお手つだいでいる時に、ほかの人が見ていることがあります。わたしは人に注目されることがはずかしいです。学校で発表することもあまりとくいではありません。わたしは、大ぜいの前で話すことがにがてです。

でも、お母さんはぜんぜんはずかしくないそうです。わたしだったらはずかしいのにすごいな。と思います。

「こまっていることがかいついたらうれしいでしょ？」と言われました。

わたしは人がこまっていることに気づかないので気づけることがすごいです。よく人を見ているんだなと思います。こうして考えてみると、こまっている人がよろこんでくれる気もちの方が大きいのかなと気づきました。

今の私にはまだ自分で話しかける勇氣はないけれどお母さんが声をかけたら後ろで何かお手つだいをしたりあいさつをいっしょにしたいと思います。少しずつなれていって、おとなになったらお母さんのように自分で声をかけておつだいができるような助けあいのできるやさしい大人になりたいです。

新潟県共同募金会長賞

募金や寄付で幸せに

糸魚川市立能生中学校

一年 くさ ま り お
草 間 吏 穂

私は、あることをきっかけに募金活動に参加するようになりました。それは、同じクラスの子でした。その子は、ユニセフの募金活動に参加していました。その子になんで募金しているか聞いてみると、「世界には病気にかかるけど薬がなくて死んでしまう人もいるから、そういう人たちを一人でも多く助けたいから。」と言いました。その言葉に私は感動して私もやりたいと思い、募金活動に参加するようになりました。

私が最近、募金をしたのは、トルコの大地震のときです。なぜ募金をしたかという、日本の救助隊の方々がトルコに行ったことを知り、私も募金でトルコの方々を助けたい思ったからです。その後、ネットニュースやテレビなどでトルコに何億もの募金がされていることを知り、びっくりしました。でも、その中に、私の募金したお金が入っていると、すごくうれしく思いました。いろんな方々のためになることは、すごくうれしいし、いろんな気持ちを持ってました。

この募金活動を通して、いろいろな団体に募金をしました。例えば、動物を殺処分から救うための募金活動やユニセフなどです。それに、寄付もするようにしました。使わなくなった、人形、服などを団体をとおして、外国、日本のどこかに寄付しました。この活動を行った理由は、服や人形などが買えない人たちにあげて少しでも幸せになってほしいからです。寄付をした団体の方から、感謝のメッセージがとどきました。すごく、うれしかったです。他にも寄付した人形を持つてる外国、日本の方を見るとその子が笑顔で人形を持っていてくれてすごく「寄付してよかったな」と思いました。私の家にはたくさんの人形や服があります。すぐに捨ててしまうのではなく、少しでもだれかのためになるようにするにはどうしたらいいかを考えてみると、すぐにできることがあるということが分かりました。

この二つの活動を通して、少しの金額や一つの人形でだれかが笑顔になると気付きました。私はそれからもだれかのためになるように、募金や寄付を続けていきます。そして、自分なら世界の人たちから人形や募金活動で集まったお金が届いたら、すごくうれしいと思うし、いろんな人たちの気持ちがそのものにこめられて届くと思うので、ありがたく大切に使いたいと思うでしょう。これからも、みんなで募金や寄付をして、一つでも笑顔をたくさん作りたいです。もし、できたら現地まで行って自分の手でいろんなものをわたしてあげたいと思いました。食料や生活に必要なものも寄付をしていきたいです。いろんなことを考えて、ものをかったり、使ったりしたいし、いろんな人のことも考えていきたいと改めて思いました。募金活動に積極的に参加していきます。